OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上方画壇における絵手本文化と文芸の交錯　ー大岡春トと曾我蕭白を中心にー
Author(s)	波瀬山, 祥子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103176
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　波瀬山　祥子　）	
論文題名	上方画壇における絵手本文化と文芸の交錯 ―大岡春卜と曾我蕭白を中心に―

論文内容の要旨

本論は、本論は、十八世紀の上方画壇における絵手本文化と文芸との交錯について、大岡春卜（一六八〇～一七六三）および曾我蕭白（一七三〇～一七八一）の作品を中心に考察したものである。

第一部第一章「大岡春卜『明朝紫硯』の制作背景―題詩の典拠と徂徠学派との関わりを中心に―」では、春卜の代表作『明朝紫硯』の制作背景を考察した。まず、初版本の実見を通して得られた諸本の相違を確認し、装丁や図のならびに至るまで、中国画譜の影響が色濃く見られることを指摘した。中巻の扉のみ日本の家紋を思わせる意匠が描かれており、ここには資金提供など本書の制作に関与した人物が暗示されていると推測した。『明朝紫硯』の図様の多くは『芥子園画伝』に基づくが、春卜は図や題詩に変更を加えている。これは、同時期に刊行が予定されていた和刻本の『芥子園画伝』（河南楼本）と類版にならないよう版元側で調整が行われた可能性が高い。改変箇所を確認すると、絵と詩が響き合うよう工夫が施されており春卜のこだわりが感じられる。さらに、これまで不明とされてきた題詩の典拠が、王世貞の『弇州山人四部稿』であることを明らかにした。具体的に春卜は、享保21年刊行の『弇園詠物詩』を目にした可能性が高い。『弇園詠物詩』は『四部稿』から詠物詩のみを抜き出した書物で、版元の一人に『明朝紫硯』と同じ渋川の名が見られる。また、『明朝紫硯』に先行して刊行された春卜の『詠物史画』についても『四部稿』の詠物詩をそのまま引用していた。王の詩は、当時の日本で隆盛した荻生徂徠を祖とする徂徠学派のなかで尊ばれていた。春卜は、菅甘谷ら大坂の徂徠学派の人々と交流があり、王の詩の使用も、こうした人的交流によるものであり、『明朝紫硯』の制作に、菅甘谷らが関与した可能性を示唆した。

第一部第二章「大岡春卜と朝鮮通信使―『桑韓画会　家彪集』における画題の選択をめぐって―」では、延享五年に来日した朝鮮通信使の画員・李聖麟と春卜らが、席画を通じて交流したことを記念して出版された『家彪集』を取り上げ、画会における各人の画題選択の理由を探った。李聖麟の「墨梅」は、中国・朝鮮の文人画の系譜に連なるものであり、中国画の遺風を取り入れたい春卜の要望に応じたと考えられる。さらに、画会の場所が大坂であることを踏まえると、この梅には日本と朝鮮にちなむ和歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」のイメージも含まれている可能性が高い。「福禄寿」は、頭部が短く実際の人間に近い風貌であることから、70歳を迎えた春卜の長寿を願って描かれたと考えられる。李聖麟は春卜の長寿を願って長生薬も贈ったことが本書の記載から分かる。それに対し、春卜と江阿弥は、狩野派や雲谷派など日本の古画の様式で描き、朝鮮画との対比を狙っている。春卜の「長果老」は、瓢箪から馬（こま）を出す仙人であり、ここでは高麗（こま）人に掛けられている。さらに、朝鮮通信使の馬上才による曲馬のイメージも重ねられているだろう。また、「芦雁」には「雁書」の故事に基づき、国書を携えて海を渡る通信使を渡来する雁になぞらえた。以上から、お互いが相手の文化を思いやる態度や、異文化交流を積極的に受け入れる姿勢が画題の選択から浮かび上がる。最後に、『家彪集』が春卜単独ではなく、江阿弥や春川弟子らも加わった大岡派一門による出版物であることに着目した。画会に江阿弥を引き連れた理由には、朝鮮を代表する画家の作品を見せ、大岡派を継ぐ人物を育てる目的もあったと考えられる。以上のことから、画会の開催および『家彪集』の出版は、春卜の後進育成や、大岡派の繁栄を対外的に示すものであったと結論づけた。

第一部第三章「大岡春卜と十八世紀上方狂歌壇との交流―鯛屋貞柳像を中心に―」では、春卜が描いた「鯛屋貞柳像」を中心に、大岡春卜と十八世紀の大坂狂歌壇との交流の実態を探った。鯛屋貞柳は、近世上方狂歌の祖とされる人物である。まず、春卜と貞柳、その周辺人物との交流を狂歌集や春卜の絵手本から確認した。続けて、鯛屋貞柳像の二種類の図像について考察した。第一の貞柳像は、貞柳の高弟である栗柯亭木端が編集した追善集『狂歌手なれの鏡』の挿絵と、大阪歴史博物館所蔵の肉筆の「鯛屋貞柳像」（一幅）である。これらは「歌聖」と称される柿本人麻呂像に擬した神格化された図像である。両像は、貞柳の追善を目的とした歌会において掲げられた可能性が高い。またこの像は、木端自身が発注した自画像（三井文庫所蔵）と対で掲げられることで、木端が貞柳の正統な後継者であることを視覚的に訴える意図があったと考えられる。第二の貞柳像は、春卜が編集した絵手本『画史会要』に掲載さ

れたもので、貞柳の一周忌に娘婿柳因の依頼で制作されたものだった。この図は、神格化された第一の像とは異なり、日常的な佇まいをシンプルに描いた肖像である。春トは、貞柳十七回忌の追善の意図をもって『画史会要』にこの像を掲載したのだろう。木端による「貞柳二世」としての活動が活発化するなか、春トは柳因の依頼によるこの貞柳像を刊行物に掲載することで、貞柳の追悼を果たすとともに、その姿を後世に伝えることを志したと考えられる。

第一部附論「春トデザインの欄間（旧杉山家住宅所蔵）―『欄間図式』との比較―」では、大阪府富田林市寺内町に所在する旧杉山家住宅の欄間「筧に菊」を取り上げた。この欄間は、制作年と発注主が明確であるため、春トト研究における基準作として貴重である。欄間は、元文2年、酒造業を営む杉山家の奥座敷増築に際し、春トが「筧に菊」の下絵を担当した。杉山家文書「萬留帳」には発注から納品までの記録があり制作過程を知ることが出来る。欄間は、透かし彫りによって菊の花と筧が精緻に表現されており、春トのデザイン力と高度な職人技が見て取れる。『欄間図式』の作者「大岡隼人」については春トとは別人とする説もあるが、旧杉山家住宅の事例から見て、本書の作者は春トである可能性が非常に高い。本書には、欄間とよく似た「菊尾花」や「筧遣水に蔦」が収録される。また、菊の意匠には、菊慈童という酒と長寿にまつわるイメージが込められており、欄間に表現された筧からあふれる水の勢いには、発注主・杉山善左衛門の長寿と、酒造業を営む当家の繁栄を願って選ばれたと推察した。

第二部第一章「曾我蕭白の鳥獣画と文芸」では、蕭白による特異な図様をもつ鳥獣画の文芸的典拠を探り、それらの制作意図や描かれた状況について考察した。最初に取り上げた「鷹図押絵貼屏風」（個人蔵）は、伝統的な鷹図の形式と構成を踏襲しつつも、前例のない図様を含む点が注目される。中でも、右隻第四扇のシルエット状の鷹には、柿本人麻呂による山鳥の和歌が、左隻第一扇の水鏡に映る鷹には、「野守の鏡」の歌が典拠として想定されることを指摘した。その他の扇に描かれた鳥獣についても、諺や成句などの文芸的要素に着目し、本図が鑑賞者の語りや連想を誘発する目的で制作された可能性を提示した。次に、伊勢の豪農・永島家に伝来した襖絵群、いわゆる旧永島家襖絵（三重県立美術館所蔵）のうち「松鷹図」「禽獣図」「狼狢図」「牧牛図」の四図を取り上げた。「松鷹図」では、鷹の背後に描かれた猿の存在から、強者を揶揄する成句「うゑみぬわし（上見ぬ鷲）」の寓意が読み取れる可能性を示した。一方で、主題の統一が見出しにくい「禽獣図」および「狼狢図」については、画面に粗密の異なる描法が混在していることに着目し、それが制作の状況を反映している可能性を論じた。この仮説を裏付ける材料として「牧牛図」の事例を挙げた。この図は、伊勢地方に伝わる西行伝説を取り入れた図様であるとともに、「酔指画」と記された署名から、即興的な席画であった可能性が高い。また、蕭白が襖絵と同時期に、津藩の儒者・奥田龍渓の狂歌集『存心』の挿絵を手がけていたこと、その本の中に「牧牛図」と相関する図が含まれている点に注目し、襖絵が伊勢における文芸的交流のなかで発想された可能性を指摘した。これらの検討を通して、蕭白が伊勢地方の文芸界と深く関わっていたこと、また、襖絵の一部が即興的に描き加えられた「席画」であることから、「禽獣図」および「狼狢図」も俳諧や狂歌など、文芸の遊戯的な場において生成された可能性があることを提示した。第二部附論では、旧永島家襖絵「竹林七賢図」における雪景色の表現が、謡曲「鉢木」および浄瑠璃・歌舞伎の「女鉢木」に基づくという浅野秀剛氏の指摘を受け、当時の「女鉢木」の流行を改めて確認した。蕭白は、「女鉢木」に登場する旅僧に自身を重ね、宿を提供した永島家への感謝の意を込めて本図を描いた可能性があることを指摘した。

第二部第二章「曾我蕭白と『存心』」では、前章をうけて明和元年に刊行された『存心』（三巻三冊）の内容や挿絵について考察した。『存心』の著者は、津藩に仕えた儒者・奥田龍渓であり、蕭白は下巻の28点の挿絵を手がけた。内容の大部分は、元文2年頃までに完成していたと考えられるが、蕭白が伊勢地方を最初に訪れた宝暦8～11年頃に挿絵が加えられ、文章もそれに合わせて加筆修正されたようである。中巻の挿絵は、龍渓と福田元栄（詳細不明）が担当している。この巻で、七福神が多く描かれているが、これらのいくつかは大岡春トの絵手本『和漢名画苑』の図様を参考にしている。先行研究においても複数の蕭白作品に『和漢名画苑』との類似が指摘されることから、挿絵制作の際、蕭白がこの手本を二人に提示した可能性も考えられる。また、下巻の人物画は、享保9年刊行の古磵の『人物草画』の図様を参考にした可能性が高い。古磵は十七世紀に活躍した画僧であり、蕭白が絵を学んだ高田敬輔の師にあたる。蕭白がこの図様を参考にした理由としては、古磵の草体の画風が狂歌に添える絵としてふさわしかったこと、さらには古磵―敬輔―蕭白という画家としての系譜を意識したためとも考えられる。『存心』が蕭白の画業にどのような影響を与えたのかについても考察した。下巻のうち、樹木の下で泥酔する人物の挿絵は、宝暦8～11年に制作された「李白酔臥図屏風」（三重県立美術館蔵）の李白の姿によく似ており、これは「酔臥」を軸とした図様の転用と考えられる。また、鎌倉時代の武将青砥藤綱の逸話を描いた挿絵は、明和元年以降に制作された「青砥藤綱・韓信図屏風」（個人蔵）に影響を与えたと考えられる。さらに、蕭白の代表作に数えられる旧永島家襖絵（三重県立美術館蔵）のうち、動物が描かれた襖絵には、『存心』に見られるような教訓的なイメージが込められている可能性についても述べた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　波瀬山　祥子　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　門脇　むつみ 副 査　大阪大学　教授　藤岡　穣 副 査　実践女子大学　教授　馬渕　美帆

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　上方画壇における絵手本文化と文芸の交錯―大岡春卜と曾我蕭白を中心に―

学位申請者　波瀬山祥子

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　門脇むつみ
副査　大阪大学教授　藤岡穣
副査　実践女子大学教授　馬渕美帆

【論文内容の要旨】

本論文は、江戸時代中期の上方で活躍した二人の画家・大岡春卜（一六八〇～一七六三）、曾我蕭白（一七三〇～一七八一）の画業を文芸との関わりに焦点をあて考察する。二部構成で第一部は「大岡春卜研究の現状」と題し三章と附論、第二部「大岡春卜から曾我蕭白へ」は二章と附論からなる。

第一部第一章は、春卜の代表作『明朝紫硯』を扱う。まず、初版、異版を整理し、装丁や図の配列における中国画譜の影響を明らかにし、『芥子園画伝』の図に独自な変更を加えた理由を既に指摘のある類版の回避としつつ、春卜による工夫を考察した。また題詩が、王世貞『弇州山人四部稿』それも享保二十一年刊『弇園詠物詩』に基づくことを新たに証した。当時の徂徠学派における王世貞の評価、徂徠学派儒者で岸和田藩士の菅甘谷との交流、中巻扉の意匠に注目し、刊行の後援者に岸和田藩主・岡部家を想定するなど、制作環境の解明も行った。

第二章は、延享五年（一七四八）来日の朝鮮通信使の画員・李聖麟と春卜らの画会を記念した『家彪集』を取り上げる。当日の席画に基づく挿絵について、李聖麟「墨梅」を中国・朝鮮の文人画に連なる図様で、大坂にちなむ和歌イメージも込めたものと考証した。また、春卜と門弟・江阿弥の狩野派などの様式に朝鮮画との対比を見出し、春卜「長果郎」の駒に「高麗人」および馬上才による曲馬イメージを重ねるなど両国の交流を意識した画題選択を説いた。その上で、『家彪集』を春卜の後進育成と大岡派の繁栄を対外的に示すものと結論づけた。

第三章は、近世上方狂歌の祖・鯛屋貞柳とその周辺の肖像画制作に焦点をあてる。いずれも春卜が描く、貞柳高弟・栗柯亭木端編『狂歌手なれの鏡』挿絵、肉筆「鯛屋貞柳像」（大阪歴史博物館蔵）を分析し、貞柳が「歌聖」柿本人麻呂像に通じる姿で表されたとする。また、後者を木端発注の月岡雪鼎筆「栗柯亭木端像」（三井文庫蔵）と対で追善供養において用いた、木端を貞柳後継者と位置付ける役割を持ったものとした。一方、春卜は自身の絵手本『画史会要』に日常的な姿の貞柳像を載せ、木端とは異なる追悼の意図を有した可能性を示した。

附論は、春卜が下絵を描いた旧杉山家住宅の欄間「筧に菊」（大阪府富田林市）を扱う。杉山家文書「萬留帳」により制作経緯や元文二年（一七三七）の完成を示し、重要な基準作であることを明らかにした。また、『欄間図式』挿絵の図様との類似から、作者・大岡隼人が春卜である可能性を提示した。さらに、菊の意匠が菊慈童が象徴する酒と長寿、筧から溢れる水が発注主の長寿と酒造業の繁栄を祈願する意図に基づくことを指摘した。

第二部第一章は、蕭白による鳥獣画の特異な図様を考察する。「鷹図押絵貼屏風」（個人蔵）を柿本人麻呂の和

歌、「野守の鏡」歌をはじめ諺や成句などに基づく、鑑賞者の連想を誘発する作品と位置付けた。旧永島家襖絵（三重県立美術館蔵）のうち「松鷹図」が強者を揶揄する成句によること、「牧牛図」が伊勢地方に伝わる西行伝説を参照することを検証した。また、襖絵と同時期の津藩儒者・奥田龍渓の狂歌集『存心』（一七六四年刊）挿絵と「牧牛図」の関連を分析し、襖絵が伊勢における俳諧狂歌に関わる環境で制作されたと推定した。

附論として旧永島家襖絵中の「竹林七賢図」と謡曲『鉢木』および浄瑠璃・歌舞伎『女鉢木』との関係を考察した。先行研究が指摘する当時の『女鉢木』の流行を追認した上で、蕭白が『女鉢木』に登場する旅僧に伊勢を遊歴する自身を重ね、宿を提供した永島家への感謝の意を込め制作した可能性を示した。

第二章は、狂歌集『存心』を扱う。蕭白と著者・奥田龍渓らとの交流に基づき、龍渓らによる中巻挿絵の春卜『和漢名画苑』の参照を蕭白からの情報提供とする。また、蕭白が手がけた下巻挿絵のうち人物画が蕭白の師匠筋にあたる明誉古礀『人物草画』を典拠とする可能性を指摘し、蕭白の画系への意識を読み取るとともに、古礀の草体画風と狂歌の親和性も考察する。また、『存心』挿絵制作が旧永島家襖絵「禽獣図」における蝙蝠の登場などに関わるとし、改めて旧永島家襖絵の鳥獣画が『存心』に通じる教訓的イメージを宿していることを示した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は作品の実見を基本に、その造形的特質と文芸との関わりを正当に評価することに努め、関連の史料を博捜し、各作品の成立と受容の問題を実証的に研究したものと評価できる。本文は 95000 字余、図版、年譜、各版本の画像一覧、詩文の全文翻刻等の資料編もあわせるとＡ４判で約 250 頁となる。

日本近世絵画史において絵画と絵手本、絵画と文芸との関わりは、いずれも非常に重要なテーマであり、従来、多くのケーススタディが蓄積されてきた。しかしながら、春卜については絵手本を多数刊行した影響力の大きい画家と認識されながらも画業に本格的に向き合う研究はほとんどなかった。本論文が、代表作である『明朝紫硯』の題詩が王世貞の作の引用であることを明らかにし、それに伴い徂徠学派との人的交流を踏まえ制作環境に対しても一定の見解を提示したことの意義は大きい。また『家彪集』挿絵の画題選択理由の解明は、当時の日朝間にわたる文化人交流における絵画史研究からの新たな糸口としても特筆される。また、鯛屋貞柳像をめぐって浮かびあがる当時の上方狂歌の重要人物およびその文芸的動向と春卜の関係も従来にない指摘である。旧杉山家住宅の欄間「筧に菊」は、大坂の有力商家からの発注への対応を具体的に跡付ける。以上のように、本論文は春卜の複数の作品を文芸との関係において検証し、春卜の画業全体の把握ひいては当時の上方画壇と文壇の関わりについて今後の研究の基盤となる重要な内容を有す。一方、蕭白はこれを単独で取り上げる展覧会も多く開催される著名画家であるが、従来、文芸との関わりを重視した研究は多くはない。そうしたなか、伊勢地方での作画が当地の文芸、人的交流と深く結びつくことを明示し、蕭白の代表作の一つである旧永島家襖絵について新たな読み解きを行い、詳細な分析がなかった『存心』挿絵の意義を明らかにした本論文の成果は大きい。これらの作例はいずれも蕭白画としても近世絵画としてもかなり特異な図様を示すが、その特異性が地域の伝承や伊勢の儒者による教訓性を備えた狂歌との関わりによって説明できるという指摘は、伊勢および播磨に遊歴する期間の長かった蕭白という画家の検討にあたり特に留意すべきことである。以上のように、本論文は個々の画家、作品論として充実した内容を示し、今後の研究の進展に大きく寄与するものである。

第一部の春卜と第二部の蕭白の関連性および美術と文芸との関わりについて、従来の研究史上に本論文の内容を俯瞰的に位置づける論述がやや不足するが、その点も本論文の価値を大きく損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。